一太郎が選ばれる理由

かつて、ワープロソフトと言えば一太郎という時代があった。いつしかWordにシェアを奪われ、今では一太郎を知らないという若い世代まで居る程になっているが、それでも毎年新版がリリースされていて、それなりの数のユーザが居る。
何故かと考えてみると、いくつか理由が思い当たる。まずは唯一の国産ワープロソフトである点。日本語の文書を作成するのに、海外製のソフトを使う矛盾がある。日本の文化が反映されているのはやはり日本製のソフトをおいて他にない。
日本語入力のATOKも、高い変換効率が評判で、シェアは低くてもが根強いニーズがあり、ATOKの性能の良さとの関係を考えてワープロソフトとしても一太郎が選択される場合もあると思える。
また、一部の公的機関がなお標準で使っているというのも大きい。公的機関が使っているというだけで、それが日本語の文書を作成する標準的なものというイメージもできあがり、何より大きな安心感がある。
小説や記事を書くために便利な機能や国語などの試験問題文、あるいは各教科の教材を作成するのに適した機能もあり、プロアマ問わず作家の人や記者・ライター、教育機関の人にもユーザが多い。
何と言っても、操作体系やインターフェースが今なお昔のものを踏襲して進化していて、そういう不変性が古くからのユーザに受け入れられている。我々日本人のニーズをくみ上げて改良が続けられているような、日本的なサービスの価値が認められている。結局、何でも世界標準が良いというわけではないのである。

そういう自分も、ワープロソフトは一太郎という時代に使い始めた。ワープロ専用機に使用感が似ていて習得しやすく、しばらくはメインで使った。
Windows95対応、32ビットになった一太郎７が酷いことになっていて、マクロなど機能が大幅に削減されて進化が後退し、著しく動作が重くなり実用に耐えない状態となって、それを機にWordに転向せざるを得なかった。おかげでWordも使えるようになり、今でも仕事ではWord派でもあるが、ATOKはずっと使い続けている。
ただ、Wordはユーザのニーズの反映ではなくメーカー側の押しつけでの機能追加という気がしてならないと感じていて、機能に合わせて文書を変えなければならないという気もして、まさにワープロソフトに使われる感じがするのが嫌である。
今なお日本的な進化を行っている一太郎を見ると、懐かしさもあるが自分に合っているのはこっちだと思うように、自然とまた一太郎に戻ってきてしばらく経つ。
私用の範囲では、以来ずっと一太郎がメインであるが、自宅の用途ではそんなに一太郎を使う機会もないのも事実である。